〔個人研究〕

ジャータカの植物観
— 樹神の本生話を中心として —

平 林 二 郎

0　はじめに

インド仏教では一般的に人間や動物など情（心の働き、感情）を有するものを有情（sattva）とし、植物・山・川・土・石など情を有さないものを非情（asattva）とする。この区分はインド仏教における輪廻や、覚りの対象の区分ともなっており、有情は輪廻し、覚る可能性があるものであると考えられ、非情は輪廻せず、覚らないものであると考えられている[1]。

上座部仏教においても植物は非情に分類されるのが通例であり[2]、輪廻せず、覚らないと考えられている。しかしながら、岡田（1996:（228）. 3.7）は、*Jātaka*（Ja）における草木神と草木（植物）が密接な関係にある本生話を考察し「草木神を立てることによって、パーリジャータカは草木を、生命体のパラダイムに包含していたと考えられる」と論じている。また、岡田（1999: 106. 1.7）は「パーリジャータカは、樹木の魂としての樹神（rukkhadevatā）[3]がやがて転生して仏にうまれ変わるということで、草木と人と仏を同一次元においている」と論じている。

これらの岡田の研究成果は、Ja の伝承者たちが草木神と密接な関係にある草木（植物）を有情・生きものであると見なし、それらは輪廻し、覚る可能性がある

1　渡辺（2007: 40）は「有情は情（心の働き．感情）を持つものという意味で、生きているものの総称として用いられ、狭義には人間を意味する。一方、心の働きをもたないものが非情（asattva）であり、山川・土石など精神作用のないものをさしていう。草木も一般的には非情とされる」としている。

2　藤本（2003: 101）は「植物は五道・四生の枠に入らず、心・心所を持つとも説かれておらず、むしろ物質世界の一部として扱われることから、植物には心・心所はない、即ち植物は無情であると考えられる」と論じている。無情は非情と同義である。

3　（　）内の原語は筆者の補い。

と考えていたことを示す枢要なものである。しかし、岡田（1996, 1999）においては、紙幅の制限からであろうが、樹神の登場する多くの本生話が詳細に検討されないままとなっている[4]。

そこで本稿では Ja において、釈尊や仏弟子の前生である樹神が登場する本生話[5]と、前生ではない一般の樹神が登場する本生話[6]と、樹神と樹に言及する本生話[7]について、樹神と樹の関係、ならびに、それらの役割を検討し、Ja の植物観を明らかにしていきたい。

1　Ja における樹神と樹の関係

Ja の植物観を論じた Schmithausen（1991: 15）[8]や岡田（1996:（228）. 3.7）[9]は、草木神と草木が密接な関係にある本生話に注目している。そこで本稿でも、樹神が登場する本生話と樹神と樹に言及する本生話から、Ja における樹神と樹の関係について検討していきたい。

1.1. 樹神の生じ方

まず、樹神の生じ方について検討していきたい。Ja の多くの本生話では「菩薩

4　岡田の論文では主に 9 つの本生話を研究の対象としている。岡田（1996:（227）-（228））では、主に J18, J19, J74, J109, J272, J412, J465, J121（草の神）の 8 話について考察し、また、岡田（1999: 108. 註 10）では以上に加え J475 について言及している。

5　Ja において釈尊の前生が樹神であった本生話は以下の 30 話である。J18, J19, J38, J74, J102, J105, J109, J113, J139, J187, J205, J209, J217, J227, J272, J283, J294, J295, J298, J307, J311, J361, J400, J412, J419, J437, J465, J475, J492, J520。次に、仏弟子（釈尊の弟子）の前生が樹神であった本生話は以下の 7 話である。J72, J74, J121, J311, J402, J414, J537。この 7 話のうちの 2 話（J74, J311）は釈尊の前生も樹神であった話であり、J121 は釈尊の前生が草の神であった話である。したがって、仏弟子だけが樹神として登場する本生話は J72, J402, J414, J537 の 4 話である。

6　一般の樹神が登場する本生話は以下の 7 話である。J257, J278, J370, J438, J488, J493, J509。

7　樹神と樹に言及する本生話は以下の 6 話である。II *Avidūrenidāna*, J50, J77, J98, J353, J536。これらについては樹神（rukkhadevatā）、もしくは、樹における神（rukkhe ... devatā）などとあるものを対象とした。この他に Ja には、J13 の釈尊の前生が森林に生じた神であった話や、J121 の釈尊の前生が草の神であった話が見られる。

8　Schmithausen（1991: 15.12-16）は “Buddhist texts like the Bhaddasālajātaka where the tree deity shows characteristic features of a tree soul since she（or: he?）is closely connected with the tree she inhabits that she has to die when it is felled, and since she even calls it her body and the saplings her children.” と論じている。

9　岡田（1996:（228）. 3.7）は「特に J412、J465 バッダサーラ樹神本生は草木神と草木の密接な関係を示して重要である」と論じている。

は樹に樹神として生じた」などとあり[10]、どのように樹神が生じたのか、その詳細はわからない。

樹神の生じ方について、Ja no. 121（*Kusanāḷijātaka*、以下では Ja no. を J とし J121 と表記する）では、王苑にルチャ樹があり、そこに樹神が生じたという描写がある[11]。次に、J465（*Bhaddasālajātaka*）では、若いサーラ樹に樹神が生じている表現がある[12]。そして、J370（*Palāsajātaka*）において、ニグローダ樹の樹神は、苗のときには生じておらず、大きな樹になってから生じたとある[13]。これらの本生話を見ると、樹神は、小さい苗のような段階ではなく、樹と呼べる程度の大きさになってから生じているようである。また、J121 には、ルチャ樹の樹神が子どもたちを連れて逃げようとしたが、逃げるところが見つからずに泣いたとあり[14]、ルチャ樹の樹神には子どもがいたとわかる。J74（*Rukkhadhammajātaka*）にも、住まいを壊された樹神たちが子どもたちの手を取る描写があり[15]、樹神には人のように手を取ることができる子どもの樹神もいたとわかる。さらに、J465 には、サーラ樹の樹神が自身の周囲に立つ若いサーラ樹に生じた親族の樹神たちを案じている箇所が

10　例としては、J38（*Bakajātaka*）には「かつて菩薩は、ある林野の〔獣たちの〕の溜まり場の、ある蓮池のほとりに立っている樹に樹神として生じた（atīte ekasmiṃ araññāyatane bodhisatto aññataraṃ padumasaraṃ nissāya ṭhite rukkhe rukkhadevatā hutvā nibbatti. Ja I. 221.22-24）」とあり、また、J298（*Udumbarajātaka*）には「菩薩は林野に樹神として生じた（bodhisatto araññe rukkhadevatā hutvā nibbatti. Ja II. 445.19）」とあり、J311（*Pucimandajātaka*）には「菩薩は都の墓地の森にあるニンバ樹に樹神として生じた（bodhisatto nagarassa susānavane nimbarukkhe devatā hutvā nibbatti. Ja III. 34.2-3）」とある。

11　菩薩は王苑のクサ草の茎に神として生じた。そのとき ...（略）... ルチャ樹があり、それはムッカカとも呼ばれていた。そこに一人の大きな力を有する〔樹〕神王が生じた。菩薩と彼は親しくしていた（bodhisatto rañño uyyāne kusanāḷigacche devatā hutvā nibbatti. tasmiṃ ...（略）... rucarukkho atthi, mukkhako ti pi vuccati. tasmiṃ eko mahesakkhadevarājā nibatti. bodhisattassa tena saddhiṃ mittasanthavo ahosi. Ja I. 441.20-25）。上記の「クサ草の茎に神として生じた」という訳については岡田（1996: 註 11））を参照した。

12　この樹をめぐって立っている若いサーラ樹に生じた私の親族の神々の多くの住まいも壊されてしまうだろう、また知っての通り、親族が〔滅ぶ〕よりも私自身が滅ぶ方が私を悩ませない。それゆえ、私は彼らの命を助けた方がよい（imañ ca rukkhaṃ parivāretvāpi ṭhitesu taruṇasālarukkhesu nibbattānaṃ mama ñātidevatānam pi bahūni vimānāni nassissanti, na kho pana maṃ tathā attano vināso bādhati yathā ñātīnaṃ, tasmā tesaṃ mayā jīvitadānaṃ dātuṃ vaṭṭatīti. Ja IV. 154.6-10）。

13　その後、ニグローダ樹は大きくなった。その際、その樹の樹神も生じた（aparabhāge nigrodho vaḍḍhi. tasmiṃ ekā rukkhadevatāpi nibbatti. Ja III. 209.23-24）。

14　行くべき場所が見つからず、子どもたちを首に抱いて泣いた（gantabbaṭṭhānaṃ apassantī puttake gīvāya gahetvā parodi. Ja I. 442.13-14）。

15　住まいを壊された頼るところのない〔樹〕神たちは、子どもたちの手をとって ...（bhaggavimānā devatā nippaṭisaraṇā dārake hatthesu gahetvā ... Ja I. 328.30-31）。

あり[16]、樹神には家族を広く形成しているものも存在している。

この他に樹神と樹についてではないが、J121 においてはクサ草の茎に草の神が生じており[17]、また、J13(*Kaṇḍinajātaka*)においては森林に神が生じている[18]。草や、森林に生じた神がいることを見ると、ある程度の大きさの樹以外にも植物神が生じており、植物神が生じる条件に一定したものはないと考えられる。

1.2. 樹神が命を共有する樹を変えることができるもの

J74 では、人の通りの多いところにある愚かな樹神たちの宿る樹々が大嵐によって倒れ、その後、愚かな樹神たちは別の場所（サーラの森）に移動して、その災難の話をしている[19]。次に、J121 では、王宮の柱にするために伐られそうになっているルチャ樹の樹神が子どもの樹神たちと逃げようとしている[20]。J139（*Ubhatobhaṭṭhajātaka*）では、樹神は町において漁夫の妻が喧嘩をして村人たちに罰金を払えと叩かれた様子を見ており、林野では漁夫が切株に目をぶつけて失明する様子を見ている[21]。以上を見ると、Ja において樹神は生じた樹から別の離れた場所にある樹に移動できる存在であるとわかる[22]。また、J74 において樹神が大嵐で倒れた樹から別の樹に移動し生き延びているところを見ると、樹神は命を共有する樹を変えることができる存在であるとわかる。この他、J74 や J139 を見ると、樹神は樹々を移動しており、Ja を見る限り一本の樹に複数の樹神が生じ宿る例は見られないことから、すべての樹に樹神が生じ宿るとは考え難い。

1.3. 樹神が命を共有する樹を変えることができないもの

Ja には、命を共有する樹を変える樹神の他に、命を共有する樹を変えることが

16　本稿註 12 を参照せよ。
17　本稿註 11 を参照せよ。
18　そのとき、菩薩はその森林に神として生じた（tadā bodhisatto tasmiṃ vanasaṇḍe devatā hutvā nibbatto hoti. Ja I. 154.25-26）。
19　Ja I. 328.15-329.1 を参照せよ。
20　Ja I. 441.25-442.14 を参照せよ。この本生話の樹神は移動して逃げようとしてはいるが、厳密には移動先が見つからないため断念している。
21　Ja I. 482.27-483.30 を参照せよ。「樹神は町では漁夫の妻のこの顛末を、林野では漁夫の不幸を見て〔いた〕（rukkhedevatā gāme tassā imaṃ pavattiṃ araññe c' assā patino taṃ vyasanaṃ disvā ... Ja I. 483.24-26）」とある。
22　岡田（1999: 106. 1.8）は「従来 樹木神は草木とは個別の存在であって、樹々から別の樹々に移動できるものと見られてきた」としている。

できない樹神が見られる。Schmithausen（1991: 15）や岡田（1996:（228）. 3.7）は命を共有する樹を変えることができない樹神と樹の関係を「密接な関係」としているが、両論文ともにその内容については詳細な検討がなされていないままとなっている。そこで本稿では、両論文ともに樹神と樹の密接な関係が見られる本生話として挙げている J465 について内容を検討してみたい。

J465 の内容の要約は以下である。

> 樹神の生じ宿る吉祥なサーラ樹が王宮の柱として伐られることになった。その際、樹を伐ろうとする大工たちは樹神に別の所へ移るようにお願いした。吉祥なサーラ樹の樹神は「彼の大工たちが、この樹を伐るであろうことは疑いない、私の住まいを壊してしまうだろう、他ならぬ住まい（樹）のおわりは、また知っての通り、私の命が〔終わることである〕、この樹をめぐって立っている若いサーラ樹に生じた私の親族の神々の多くの住まいも壊されてしまうだろう、また知っての通り、親族が〔滅ぶ〕よりも私自身が滅ぶ方が私を悩ませない。それゆえ、私は彼らの命を助けた方がよい」と考え[23]、自分の周りに立つ親族の樹神たちを慈しみ、若いサーラ樹たちが倒されるのを厭うた。その後、吉祥なサーラ樹の樹神は王の寝室に行き、親族の樹神の苦痛を増やさないよう[24]に訴えた。王は親族のための訴えであることを聞き、吉祥なサーラ樹を伐らなかった。

23　"nissaṃsayaṃ ime vaḍḍhakī imaṃ rukkhaṃ chindissanti, vimānaṃ me nāsessanti, vimānapariyantikam eva kho pana mayhaṃ jīvitaṃ, imañ ca rukkhaṃ parivāretvāpi ṭhitesu taruṇasālarukkhesu nibbattānaṃ mama ñātidevatānam pi bahūni vimānāni nassissanti, na kho pana maṃ tathā attano vināso bādhati yathā ñātīnaṃ, tasmā tesaṃ mayā jīvitadānaṃ dātuṃ vaṭṭatīti"（Ja IV. 154.1-10）.

24　ここでは、大きな樹を切り出す際、周囲の樹を倒すなどの被害を出すことを考えているのだと思われる。

私は断片状に伐られることを欲している、私のその理由について、
法にともなっている理由について、大王よ、お聞きください。
私の親族は私のわきで風にさらされず、安楽に成長しています、
私は彼らをも傷つけてしまうだろう。他のものたちには苦痛があることになるだろう、と。
yañ ca hetuṃ upādāya hetuṃ dhammūpasaṃhitaṃ
khaṇḍaso chinnam icchāmi mahārāja suṇohi me :
ñāti me sukhasaṃvaddhā mama passe nivātajā
te pi 'haṃ upahiṃseyyaṃ, paresaṃ assa dumocitan ti（Ja IV. 156. verse 10-11）.

J465 において、吉祥なサーラ樹の樹神は「他ならぬ住まい（樹）のおわりは、また知っての通り、私の命が〔終わることである〕」と考えている。しかしながら、樹神は王に訴えに行く際、王の寝室まで移動している。また、吉祥なサーラ樹の樹神は樹を伐ろうとする大工たちに別の所に行くようにお願いされている。以上を見ると、吉祥なサーラ樹の樹神は樹と命を共有しているが、他の樹に移動できると考えられる。

次に樹神と親族に関して、吉祥なサーラ樹の樹神は「〔自分の樹が切り出される際に、〕私の親族の神々の多くの住まいも壊されてしまうだろう」と考えている。そして、吉祥なサーラ樹の樹神は、若い樹々に生じた親族の樹神たちが苦痛を感じないようにしてほしいと王に訴えている。

すべての樹神たちが樹々を移動して、他の樹々と命を共有できるのであれば、上記のように王に訴える必要はない。したがって、親族の樹神たちのなかには樹々を移動できず、他の樹々と命を共有できない樹神がいたと考えられる。また、釈尊の前生である樹神はその移動できない樹神を慈しみ、彼らを助けるために、そこに留まっていたと考えられる。

岡田（1999: 106.1.8, 1.9, 108 註 10）は J465 の他に、J412（*Koṭisimbalijātaka*）[25] と J475（*Phandanajātaka*）[26] についても、樹神と樹が密接な関係にあると指摘している [27]。これら J412 と J475 に登場する樹神も樹と命を共有し、移動できない樹神で

25　J412 において、コーティシンバリ樹の樹神は以下の偈を述べている。
他の樹々も根を持ち、幹を持つ樹々であるが、
この鳥にうまれたものによって、種をはこばれ、枯らされる。
長生した樹々は大きな樹よりも増大する。
王よ、それゆえ私はふるえる、来ていないおそれを見つつ。
santi aññe pi rukkhāse mūlino khandhino dumā
iminā sakuṇajātena bījam āharitā hatā.
ajjhārūḷhābhivaḍḍhanti brahantam pi vanaspatiṃ
tasmā rāja pavedhāmi sampassaṃ nāgataṃ bhayan ti（Ja III. 399. verse 125-126）.
コーティシンバリ樹の樹神は、小鳥の糞のなかにある種から樹が繁り、その樹に覆われて自分が枯らされる日が来るのをおそれて震えている。

26　J475 において、樹神は「彼（ライオン）は見当違いなことで怒りに縛られて、私の住まいを壊そうとしている、そうなれば、私は亡くなってしまうだろう（ayaṃ aṭṭhāne āghātaṃ bandhitvā mama vimānaṃ nāseti, ahañ ca nassissāmi. Ja IV. 209.27-29）」と考えている箇所がある。また、この本生話において、樹神は木こりに変身し、大工に黒ライオンの皮で車輪を作らせようとしているが、この場面では樹神が変身した木こりは樹（自分）を伐ろうとしている大工に近づいているだけであり、樹がある場所から移動はしていない。

27　岡田（1999: 106.1.8, 1.9）は、密接ではなく、樹神が緊密に樹木に結びついているとしている。

あると考えられる。

J311（*Pucimandajātaka*）を見ると、ニンバ樹の樹神が盗賊を刺す串にされることをおそれている偈を述べている[28]。この本生話も樹神が樹と命を共有し、移動できない例であるかもしれない[29]。

この他、釈尊の前生の本生話ではないが、J370 において、金色のハンサ鳥（釈尊の前生）はパラーサ樹の樹神に「彼（ニグローダ樹）は汝の末魔[30]を断つだろう」と偈を述べている[31]。この偈は、ニグローダ樹が大きくなりパラーサ樹が枯らされることを「汝（樹神）の末魔を断つ」と表現している。この本生話において、釈尊の前生（金色のハンサ鳥）は樹神と樹を同じものであるとみなしている。したがって、この本生話も樹神が樹と命を共有し、移動できない本生話である。

2　Ja における樹神と樹の役割

Ja には、釈尊や仏弟子の前生である樹神が登場する本生話と、前生ではない一般の樹神が登場する本生話と、樹神と樹に言及する本生話がある。これらの本生話から樹神と樹の役割を検討してみたい[32]。

28　アッサッタよ、汝は、私が盗賊を離れた〔理由を〕知らない。
村で犯罪をなした盗賊を王の部下たちが捕まえると、
ニンバ樹の串を突き刺す、そのときを私の心はおそれている、と。
na tvaṃ assattha jānāsi mama corassa c' antaraṃ
coraṃ gahetvā rājāno gāme kibbisakārakaṃ
appenti nimbasūlasiṃ tasmiṃ me saṃkate mano ti（Ja III. 34. verse 43）.

29　樹の終わりが樹神の命の終わりであるとは記されておらず、樹神と樹が密接に関係しているのか、他の樹に移動したくないだけなのか本生話の内容だけでは判断できない。

30　mamma の音写（サンスクリットでは marman）。死穴などと漢訳され、末魔に触れると苦しみがおこり死ぬとされる。末魔については『大漢和』6.25 を参照せよ。

31　〔ハンサ鳥は〕パラーサ樹の樹神と相談をしつつ、第 1 の偈を述べた。
「ハンサ鳥はパラーサ樹に言った。友よ、ニグローダ樹が生えた、汝の腰にまさに坐って、
彼（ニグローダ樹）は汝の末魔を断つだろう」と。
palāsadevatāya saddhiṃ mantento paṭhamaṃ gātham āha :
haṃso palāsam avaca nigrodho samma jāyati,
aṃkasmiṃ te nisinno va so te mammāni checchati ti（Ja III. 208.26–209.2）.

32　J311, J412, J465 の 3 つの本生話においては、釈尊の前生である樹神が自分のために行為をしていることから役割の検討から除外した。J311 では、ニンバ樹の樹神が串にされるのを恐れて盗賊を追い払っている。J412 では、コーティシンバリ樹の樹神が小鳥に震えている理由を金翅鳥に話し、金翅鳥が小鳥を追い払っている。J465 では、親族の樹神の樹々を傷つけないようにするために、樹神が自分の生じ宿る樹を伐らないように王に訴えている。

2.1. 釈尊や仏弟子の前生である樹神と樹が果たしている役割

Ja において、釈尊や仏弟子の前生である樹神と樹神の生じた樹が果たしている役割を見ると、供養された恩に報いるもの、説法や教誡をするもの、悪者に対処するもの、忠告や予言などを与えるもの、他者の行為を見ているものという5つに分類できる。以下でそれらを検討してみたい。

2.1.1. 供養された恩に報いるもの

J109（*Kuṇḍakapūvajātaka*）では、貧しい男がごまの樹に供養した、するとその樹の樹神（釈尊の前生）が枝の茂みから姿をあらわし、ごまの樹のまわりには宝がうまっており、それを王に告げれば財官になれると言って男の恩に報いた[33]。また、J307（*Palāsajātaka*）では、貧しいバラモンがパラーサ樹を供養した。その樹の樹神（釈尊の前生）は年老いたバラモンに変身し、貧しいバラモンの願いを聞き、彼に財を与えた[34]。J520（*Gaṇḍatindujātaka*）では、気ままに国を治めている王に多くの供養を受けた樹の樹神（釈尊の前生）が、祭司官の体の中に入って王を諌めている[35]。以上の本生話では、樹が供養されたことに対して、樹神が恩に報いている。

2.1.2. 説法や教誡をするもの

J18（*Matakabhattajātaka*）では、樹神（釈尊の前生）が人々に生きものを殺すおそろしさを説法した、その後、人々は生きものを殺すことをやめた[36]。J19（*Āyācitabhattajātaka*）では、樹神（釈尊の前生）が生きものを殺して樹に捧げる供養祭を愚者の行いであると説いた、それ以降、人々は生きものを殺す行いを慎んだ[37]。J105（*Dubbalakaṭṭhajātaka*）では、死におびえる象を樹の茂みから見ていた樹神（釈尊の前生）は、その象を教誡し、象のおそれをなくした[38]。これらの本生話を見ると、樹神は対象に大きな影響を及ぼす説法をするものであり、また、教誡をするものとなっている。

---

33 Ja I. 423.6-7 を参照せよ。
34 Ja III. 23.13-25.18 を参照せよ。
35 Ja V. 98.24-108.4 を参照せよ。
36 Ja I. 167.28-168.28 を参照せよ。
37 Ja I. 169.11-26 を参照せよ。
38 Ja I. 415.11-416.2 を参照せよ。

2.1.3. 悪者に対処するもの

J187（*Catumaṭṭajātaka*）では、樹神（釈尊の前生）は二羽のハンサ鳥のひなと法話を語り合っていた。その語り合いに場違いなジャッカルが入ろうとしたためハンサ鳥のひなたちは飛び去ってしまった。そこで樹神はジャッカルを咎めた[39]。J294（*Jambukhādakajātaka*）では、樹神（釈尊の前生）がありもしない徳を互いにほめているカラスとジャッカルを追い払っている[40]。この他、J295（*Antajātaka*）では、樹神（釈尊の前生）がありもしない徳を互いにほめているカラスとジャッカルに皮肉的な偈[41]をとなえている[42]。J537（*Mahāsutasomajātaka*）では、人食い王が人を殺して樹神（仏弟子マハーカッサパの前生）のために生贄に捧げようと考えた。それを知った樹神は人喰い王の殺人を阻止するために奔走した[43]。以上の本生話において、樹神は仏教者のあり方に反する行為をする悪者に対処するものとなっている。

2.1.4. 忠告や予言などを与えるもの

J74 では、樹神（釈尊の前生）が親族の樹神たちに住まい（樹）を定める場所について忠告をしている[44]。J272（*Vyagghajātaka*）では、樹神（釈尊の前生）は、愚かな樹神が森林に住むライオンと虎を追い払おうとしている際に、それをやめるように忠告している[45]。J74 と J272 において、樹神は別の樹神に忠告を与えるものとなっている。

J113（*Sigālajātaka*）では、墓地林にある樹の樹神がジャッカルに大小便をされたバラモンに上着を洗い、沐浴し仕事をするように声をかけている[46]。この他、J402（*Sattubhastajātaka*）では、一本の樹に樹神（仏弟子サーリプッタの前生）があ

---

39 Ja II. 107.8-108.4 を参照せよ。
40 Ja II. 438.29-439.28 を参照せよ。
41 ジャッカルは動物の中での一番端、カラスは鳥類の中での一番端、
ヒマ油の樹は樹の中での一番端、一番端の３者が集まった。
migānaṃ kotthuko anto pakkhīnaṃ pana vāyaso
eraṇḍo anto rukkhānaṃ tayo antā samāgatā ti（Ja II. 440. verse 135）.
42 Ja II. 440.8-26 を参照せよ。
43 Ja V. 471.15-476.1 を参照せよ。
44 Ja I. 328.15-19 を参照せよ。
45 Ja II. 356.16-358.20 を参照せよ。
46 Ja I. 425.9-426.16 を参照せよ。

らわれ、バラモンに「留まれば自分が死に、家に帰れば妻が死ぬだろう」と予言を与えている[47]。J113 と J402 を見ると、樹神は供養をされていなくとも、人に何らかの声をかけることがあるとわかる。

2.1.5. 他者の行為を見ているもの

樹神が他者の行為を見ている本生話は、他者の良い行為を見ているもの、傍観者であるもの、悪い行為を見ているものの３つに分類できる。以下でそれらを検討してみたい。

2.1.5（a）. 樹神が他者の良い行為を見ているもの

J209（*Kakkarajātaka*）では、鷓鴣が猟師を翻弄し逃げ去ったのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[48]。J283（*Vaḍḍhakisūkarajātaka*）と J492（*Tacchasūkarajātaka*）では、勇敢なイノシシが虎と虎を操る結髪外道を退治したのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[49]。J419（*Sulasājātaka*）では、処刑寸前の盗賊を遊女が助け、その盗賊に殺されそうになった遊女が機転を利かせ盗賊を崖に突き落とすのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[50]。J437（*Pūtimaṃsajātaka*）では、ヤギが方便を語りジャッカルを追い払っているのを樹神が目撃（釈尊の前生）している[51]。また、J414（*Jāgarajātaka*）では、寝ずに修行している修行者を見て、樹神（仏弟子ウッパラヴァンナーの前生）がその修行者（釈尊の前生）を褒め称えている[52]。以上が、樹神が他者の良い行為を見ている本生話である。

2.1.5（b）. 樹神が傍観者であるもの

J102（*Paṇṇikajātaka*）と J217（*Seggujātaka*）では、八百屋の男が、良家から縁

47　Ja III. 343.16-19 を参照せよ。
48　Ja II. 161.10-162.10 を参照せよ。
49　J283 と J492 は同内容の本生話である。J283 については Ja II. 405.2-26 を参照せよ。また、J492 については Ja IV. 344.1-350.17 を参照せよ。
50　Ja III. 435.29-439.3 を参照せよ。この本生話を見ると遊女が盗賊を崖に突き落としている。しかし、遊女が機転を利かせている点と、盗賊から身を守っている点から、良い行動と考えられているようである。
51　Ja III. 532.21-536.19 を参照せよ。この本生話の本文に樹神は登場しない。
52　Ja III. 403.24-405.14 を参照せよ。この本生話を見ると樹神は寝ずに修行を行なっている修行者を目撃しているものであり、その修行者を褒め称えているものでもある。

談の話がきた自分の娘を森に連れて行き、娘の素行が良いかどうかを試した[53]。樹神（釈尊の前生）はその様子を傍観している。

2.1.5（c）. 樹神が他者の悪い行為を見ているもの

J38（*Bakajātaka*）では、池の魚を食べ尽くしたアオサギがカニにはさみで首を切られたのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[54]。J139 では、大魚を独り占めしようとした漁夫と妻が不幸な目にあう様子を樹神（釈尊の前生）が目撃している[55]。J205（*Gaṅgeyyajātaka*）では、自分の美しさを競い合う二匹の魚を樹神（釈尊の前生）が目撃している[56]。J361（*Vaṇṇārohajātaka*）では、ジャッカルがライオンと虎を仲違いさせようとし、失敗したのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[57]。J400（*Dabbhapupphajātaka*）では、魚をわけるふりをして身の部分を持っていったジャッカルを樹神（釈尊の前生）が目撃している[58]。J227（*Gūthapāṇajātaka*）では、酔った糞喰虫が象を挑発し、糞喰虫が象に殺されるのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[59]。J298（*Udumbarajātaka*）では、大猿が小猿をだまし、小猿が大猿をだまそうとしているのを樹神（釈尊の前生）が目撃している[60]。J475 では、黒ライオンが不当に〔一般の〕樹神に怒り、〔一般の〕樹神は黒ライオンに報復しようし、両者ともに殺されてしまった。その様子を樹神（釈尊の前生）が目撃している[61]。また J72（*Sīlavanāgajātaka*）では、象王の友となり、象王の牙を切り売ろうとした男が大地に沈んだのを樹神が目撃し、その樹神は「恩を知らず、友を欺く男は、たとえ転輪王〔の位〕を与えても、満足することはない」と語っている[62]。この他、J13 では、牝鹿に心を奪われた牡鹿が猟師に仕留められるのを森林に生じた神（釈尊の前生）

---

53 J102 と J217 は同内容の本生話である。J102 については Ja I. 411.30-412.22 を参照せよ。また、J217 については Ja II. 179.25-180.28 を参照せよ。
54 Ja I. 221.22-224.12 を参照せよ。
55 Ja I. 482.27-484.9 を参照せよ。
56 Ja II. 151.19-152.20 を参照せよ。
57 Ja III. 191.28-193.19 を参照せよ。
58 Ja III. 333.12-336.20. を参照せよ。
59 Ja II. 211.1-212.10 を参照せよ。この本生話の本文に樹神は登場しない。
60 Ja II. 445.18-446.23 を参照せよ。この本生話の本文に樹神は登場しない。
61 Ja IV. 207.25-211.22 を参照せよ。この本生話の本文に樹神（釈尊の前生）は登場しない。
62 Ja I. 319.22-322.23 を参照せよ。この本生話において、樹神は象と恩知らずな男の次第を目撃したものであり、その様子を語るものでもある。

が目撃している[63]。以上が、樹神が他者の悪い行為を見ている本生話である。

2.2. 一般の樹神（釈尊や仏弟子の前生以外の樹神）と樹が果たしている役割

Ja において、一般の樹神（釈尊や仏弟子の前生以外の樹神）と樹神が生じた樹が果たしている役割を見ると、供養をされるもの、正しさの根拠となるもの、悪者を殺させようとするもの、忠告を聞かないものという 4 つに分類できる。以下でそれらの本生話について検討してみたい。

2.2.1. 供養されるもの

J257（*Gāmaṇicaṇḍajātaka*）において、樹神は、かつては供養されていたのに、なぜ今は人々が自分を供養しなくなったのかを王に伝言で尋ねている。王はその樹神に、かつて樹神は森に入る人々を守っていたが、現在は守っていなかったとその質問に答えている[64]。また、J509（*Hatthipālajātaka*）では、樹神は王から供養されているのにもかかわらず、王に子どもを授けず、司祭官におどされてから、サッカに相談し、サッカの協力を得て王に子どもを授けた[65]。以上を見ると、一般の樹神は供養されても、往々にしてそれに応えない気ままなものであったようである。この他、J493（*Mahāvāṇijajātaka*）には、商人たちが樹から水などをもらったお返しに樹神に功徳をゆずる内容が見られる[66]。

2.2.2. 正しさの根拠となるもの

J488（*Bhisajātaka*）では、サッカが、仙人たちが欲望から離れているかどうかを試そうとして仙人の食べ物を隠した。その際、仙人の身内たちは自身に呪をかけて身の潔白を示した。また、そこに降りてきた樹神も自分が食べ物を隠しているのであれば、業の深い大精舎の住職に転生すると自分に呪をかけ身の潔白を示した[67]。本来であれば、仙人の身内が自身に呪をかけるだけで身の潔白を示すこと

---

63 Ja I. 154.5-156.6 を参照せよ。
64 Ja III. 303.23-308.13 を参照せよ。
65 Ja IV. 473.18-475.29 を参照せよ。
66 Ja IV. 350.19-351.15 をを参照せよ。
67 Ja IV. 308.1-310.16 を参照せよ。

ができるはずである。しかし、ここであえて樹神にも彼らと同様に身の潔白を示させているところを見ると、人々は樹神を正しさの根拠となるものと考えており、樹神と同様の行為をなすことで正しさを示そうとしたと考えられる[68]。

2.2.3. 悪者を殺させようとするもの

J278（*Mahisajātaka*）では、猿が樹神の生じ宿っている樹で過ごし、水牛に再三いたずらをしていた。その樹の樹神は水牛に角で猿を殺すように偈を述べた[69]。次に J438（*Tittirajātaka*）では、結髪外道が他の動物たちに学問を教えている鷓鴣と、トカゲの２匹の子どもを食べてしまった。樹神は２匹のトカゲの親にその結髪外道を殺してしまえと告げている[70]。以上を見ると、樹神のなかには悪者を殺させようとする荒々しいものが存在している。

2.2.4. 忠告を聞かないもの

J370 において、パラーサ樹の樹神は金色のハンサ鳥（釈尊の前生）にニグローダ樹の苗を大きくしてはならないと忠告をされている。しかし、パラーサ樹の樹神はその忠告を聞かずニグローダ樹に枯らされてしまった[71]。この本生話を見ると樹神は忠告を聞かないもの、愚かなものとなっている。

2.3. 樹神と樹に言及する本生話において樹神と樹が果たしている役割

樹神と樹に言及する本生話[72]において樹神と樹神が生じた樹が果たしている役割を見ると、祈願をされるもの、嘘の根拠に利用されるものの２つに分類できる。以下でそれらの本生話について検討してみたい。

68　この本生話では、13 のものが、自身の身の潔白を示すために自らに呪をかけている。さらに食べ物を盗まれた仙人本人も嘘をついていないことを示すために自身に呪をかける。その様子を見てサッカは、自分が食べ物を隠したと登場する。仙人の身内以外では樹神の他に象と猿も自らに呪をかけ、自身の身の潔白を示している。この本生話に登場する象は Dhp-a I. 58-65 に登場する如来に奉仕をしたパーリレッヤ象の前生である。猿はマドゥヴァーセッタという名のものの前生であるとされている。このマドゥヴァーセッタは Th-a II. 166.5 に登場するものを指していると思われる。

69　Ja II. 385.18-386.7 を参照せよ。

70　Ja III. 538.22-539.2 を参照せよ。

71　Ja III. 208.11-210.26 を参照せよ。

72　J536（*Kuṇālajātaka*）にも樹神についての言及がある（Ja V. 414.12-14）。しかし、この樹神についての言及は争っても良いことがないというところで、J475 を語っているだけであることから、役割の検討には含めなかった。

2.3.1. 祈願されるもの

II *Avidūrenidāna*[73] では、セーナーニー村のスジャーターがニグローダ樹に結婚と子どもを祈願し、願いがかなえられた後に、ニグローダ樹の樹神と釈尊を見間違えて釈尊に乳粥を捧げている[74]。また、J50（*Dummedhajātaka*）では、一本の大きなバニヤン樹に、大勢の人が集まり、その樹に生じた神のもとで、子どもや、名声や、財産などを祈願しているのが見えたとある[75]。この他、J353（*Dhonasākhajātaka*）では、司祭官が王に、ニグローダ樹に住む樹神に供犠祭をおこなうことで勝利が得られると提案している[76]。以上の本生話を見ると、樹神と樹は祈願をなされるものであった。

2.3.2. 嘘の根拠に利用されるもの

J77（*Mahāsupinajātaka*）では、バラモンが王の睡眠中の夢を都合よく解釈し、王に祭祀を行わせようとしている。そのなかで、バラモンは王や人々が法を守らなくなると、彼らの守護神、供養をうける神、樹神、虚空神なども法を守らなくなると述べている[77]。J98（*Kūṭavāṇijajātaka*）では、悪い商人が樹神に裁判をしてもらうふりをする。その際、悪い商人は樹神のふりをして声をだし、自分の取り分を不当に増やす裁定を下している[78]。以上を見ると、樹神は嘘を正当化するために利用されている。

3　樹神と樹の役割に見る Ja の植物観

本稿 §2.1. 釈尊や仏弟子の前生である樹神と樹が果たしている役割と、§2.2. 一般の樹神と樹が果たしている役割と、§2.3. 樹神と樹に言及する本生話において樹

73　*Jātakatthavaṇṇanā*（『ジャータカ註』）の最初には *Nidānakathā*「因縁物語」が置かれている。本稿ではこの箇所のみ「因縁物語」を扱う。「因縁物語」については『ジャータカ全集』I. 372. 訳注（1）を参照せよ。
74　Ja I. 68.5-70.3 を参照せよ。
75　Ja I. 259.19-26 を参照せよ。
76　Ja III. 159.25-160.4 を参照せよ。
77　Ja I. 340.1-11 を参照せよ。
78　Ja I. 404.29-405.22 を参照せよ。

神と樹が果たしている役割をもとに、Ja の植物観について考察してみたい。

3.1. 信仰の対象

Ja において樹神と樹神の生じた樹は、§2.1.1. 供養された恩に報いるものであり、§2.2.1. 供養されるものであり、§2.3.1. 祈願されるものであった。これらを見ると樹神と樹は、財・結婚・子供・名声・戦争の勝利など、さまざまなものを祈願され、貧しい者から王やバラモンにいたる多くの人々に供養されていた。

次に、§2.2.2. において、樹神は人々の身の潔白を示す正しさの根拠となっていた。また、§2.3.2. において、樹神と樹は嘘を正当化する理由に用いられていた。これは樹神と樹が正しいものであるというという通念を裏返したものであると考えられる。以上を見ると、樹神と樹は祈願や供養をなされるものであり、正しいものであるとされていた。これらを換言すれば、Ja において樹神と樹は信仰の対象となっていた。

上記のように Ja には樹神と樹を信仰する描写のある多数の本生話が含まれていた。特に II *Avidūrenidāna* を見ると、スジャーターは釈尊ではなく樹神に供養するために乳粥を捧げようとしている。釈尊にまつわる出来事のなかでも重要なものであるとされるスジャーターの布施[79]が樹神と釈尊を見間違えた偶然であったと Ja に保存されていることを見ると、樹神・樹木信仰を修正せずに伝承した仏教者たちはその信仰を受容していたと考えられる[80]。

3.2. 仏教の教えに導くもの

§2.1.2. において樹神は、人々に説法し、象に教誡し、彼らの生き方に影響を与えるものとなっている。§2.1.3. において樹神は、法話の語り合いに入ろうとした場違いなジャカルを咎め、ありもしない徳を互いに褒めあっているカラスとジャッカルを追い払い、人食い王の殺人を阻止するために奔走し、悪者に対処している。

---

79 下田（1997: 121-122）を参照せよ。

80 今西（1999: 59.14-17）はこのスジャーターの供養に注目し「釈尊に対する供養を称揚することが目的であったならば、樹神信仰との関わりは切り捨ててもよかったはずであるのに、樹神信仰をそっくりそのまま保存しているのは、それが事実に近いと感じられていたからであろう。このことは樹神信仰が極めて一般的であったことを物語っている」と論じている。

以上を見ると、樹神は、人々に説法や教誡をなし、悪業を行うものについてはそれを咎め、阻止している。釈尊や仏弟子の前生の樹神であるからかもしれないが、Ja において樹神は仏教の教えに人々を導くものとなっていた。

§2.2.3 を見ると、一般の樹神は水牛の背中でいたずらをしている猿を見て、その水牛に猿を殺すように偈を述べている。また同じく一般の樹神は結髪外道に鷓鴣と二匹の子どもを食べられてしまったトカゲに結髪外道を殺してしまえと告げている。古代インドにおいては、樹神が夜叉（yakkha）と同一視されることがある[81]。これらの Ja に登場する一般の樹神には夜叉・凶暴な鬼神の性格が含まれているように思われる。

3.3. 忠告や予言などを与えるもの

§2.1.4. では、樹神（釈尊の前生）が愚かな樹神たちに忠告を与えている。また、樹神はジャッカルに大小便をかけられた男に体を清めてから仕事に行くように告げている。この他、樹神は突然に樹にあらわれて、死の予言を与えたりもしている。以上を見ると、Ja において樹神は忠告や予言などを与えるものとなっている。

§2.1.4. や §2.2.4. には、釈尊の前生の忠告を聞かない愚かな樹神が登場する。これらの愚かな樹神は煩悩に振り回される、または、悪業をなす人々の象徴のような存在となっている。

3.4. 他者の行為を見ているもの

§2.1.5. で検討したように、Ja において樹神は他者の行為を見ているものとなっている。§2.1.5（a）. の６話では、樹神が他者の良い行為を目撃しており、§2.1.5（b）. の２話では、樹神が傍観者であり、§2.1.5（c）. の９話[82]では、樹神が他者の悪い行為を目撃している。本稿で扱った物語は 49 話であるが、樹神が他者の行為を見ている話はそのうちの３分の１以上を占める 17 話であった。

Ja において樹神は、人々に説法をする、悪者を咎めるなど、多くの行為をしているが、最も多いのは良い行為も悪い行為も含めそれらを見ているものであった。

81　山崎（1983: 139.9-140.12）を参照せよ。
82　J13 の森林に生じた神を含めれば 10 話となる。

これらを見ると、Ja を伝承した仏教者たちは樹神や樹を、人の誰のいないところでも、人々の良い行為も悪い行為もすべてを見ている目撃者・観察者と考えていたようである。

4　おわりに

本稿では Ja における、釈尊や仏弟子の前生である樹神が登場する本生話と、前生ではない一般の樹神が登場する本生話と、樹神と樹に言及する本生話に見られる樹神と樹について検討した。本稿の小結は以下である。

・樹神と樹の関係

樹神と樹の関係を見ると、樹神には樹々を移動して命を共有する樹を変えるものと、樹と命を共有して移動できないものがあるとわかった。また、樹と命を共有し移動できない樹神と、その樹神が生じ宿る樹の関係が、Schmithausen（1991）や、岡田（1996）の指摘する「樹神と樹の密接な関係」であることを確認した。そして本稿では新たに、J370 において、釈尊の前生である金色のハンサ鳥が樹神と樹を同じものとみなしている箇所を発見した。

・樹神と樹の役割から見る Ja の植物観

樹神と樹の役割から Ja の植物観を見ると、樹神と樹は祈願や供養をなされ、正しいものとされ、信仰の対象となっていた。Ja の伝承者たちは樹神・樹木信仰を受容していたと考えられる。次に、樹神が釈尊の前生であるからかもしれないが、Ja において樹神は仏教の教えに人々を導くものであった。また、樹神は人々に忠告や予言などを与えるものであった。そして、樹神と樹は、人のいないところにおいても、人々の良い行為も悪い行為もすべてを見ている目撃者・観察者であると考えられていた。

・植物は有情・生きものか

上座部仏教において植物は、心・心所を持つと説かれておらず、非情に分類さ

れる[83]。しかし、Ja において樹神は親族の樹神たちを案じ（J465）、自身の生じ宿る樹が伐られそうになるとそれをおそれて震える（J311, J412）など心（感情）を有している。また、Ja において釈尊の前生（ハンサ鳥）は樹神と樹神が生じ宿る樹を同じものとみなしている（J370）。以上の内容を踏まえれば、樹神と樹神が生じ宿る樹は心（感情）を有することから有情・生きものであると言える。

初期仏教においては、行為は意思であると定義され[84]、行為をするものが意思を持つものであり、有情・生きものであるとされている[85]。それゆえ、行為をしない植物には意思がなく、非情・生きものではないとされた。しかし、Ja において、樹神と樹神の生じ宿る樹は説法をし、人々を仏教の教えに導き、忠告を与え、他者の行為を見るなど、さまざまな行為をなしている。以上を見ると、樹神と樹神が生じ宿る樹は行為をなし、意思・心（感情）を有している。したがって Ja の内容を見る限り、初期仏教の定義からも、樹神と樹神が生じ宿る樹は有情・生きものであると言える。そして、樹神と樹神が生じ宿る樹が有情・生きものであれば、輪廻し、覚る対象ともなり得る。

なお、§1.2. で検討したように、樹神には樹から樹へと移動し、命を共有する樹を変えるものが見られる。Ja を見る限り、一本の樹に複数の樹神が生じ宿っている本生話は見られなかったことから、すべての樹に樹神が生じ宿っているとは考え難い。

また、J547（*Vessantarajātaka*）には、樹神の生じ宿っていない樹々が木の実を欲しがって泣いている子どもたちを見て、それを心配し、枝垂れて子どもたちに

83　本稿註 2 を参照せよ。

84　比丘たちよ、私は、意思が行為であると説く。思って、身体によって、言語によって、意によって行為をなす（cetanāhaṃ bhikkhave kammaṃ vadāmi; cetayitvā kammaṃ karoti kāyena vācāya manasā. AN III. 415.7-8）。

85　馬場（2018: 121-122）を参照せよ。

近づいたという偈が見られる[86]。しかしながら、散文部分[87]や、その後の偈[88]を見ると、ヴェッサンタラ王子（釈尊の前生）の威力によって樹々はおのずから枝垂れたという内容になっている。この箇所ではそれぞれ内容が異なっており、樹神の生じ宿っていない樹が意思をもって行動しているかは判断できない。上記の例はあるが筆者が調べた限り、Ja において樹神の生じ宿っていない樹が、意思をもって何らかの行為をなしている本生話は明確には見られなかった。したがって Ja の内容からは、すべての樹々が有情であるとは言い難い。

本稿では扱えなかったが、Ja と同様に「小部」に含まれる『スッタニパータ』においても植物が有情・生きものとみなされている箇所がある[89]。今後は Ja の樹神と樹以外の植物に関する記述も含め、「小部」の植物観を詳細に検討する必要があるだろう。

86　泣いた子どもたちを見て、心配した大きい樹々は
まさにおのずから枝垂れ、子どもたちにとどいた。
rodante dārake disvā ubbiggā vipulā dumā
sayam ev' onamitvāna upagacchanti dārake（Ja VI. verse 223（1907））.

87　道の両脇に種々の実をつけた樹々を見て、子どもたちが泣いた。実をつけた樹々は偉大な人の威力によって枝垂れて手で触れるほどになった。
maggassa ubhato passe vividhaphaladhārino rukkhe disvā dārakā kandanti, M（ahāsatt）
assānubhāvena phaladhārino rukkhā onamitvā hatthasamphassaṃ āgacchanti（Ja VI. 513. 17-19, また、( ) 部分は筆者の補い）.

88　世間における実に稀有なこと、身の毛のよだつ未曾有なこと、
ヴェッサンタラ〔王子〕の威力により、まさにおのずから樹々が枝垂れた、と。
accheraṃ vata lokasmiṃ abbhutaṃ lomahaṃsanaṃ
Vessantarassa tejena sayam ev' onatā dumā ti（Ja VI. verse 225（1909））.

89　世尊は〔答えた〕「ヴァーセッタよ、私はあなたたちに、順次、あるがままにそれら〔生きもの〕の種の区分を説明しよう、実に〔生きものの〕種は互いに異なっている。
草や樹に〔区分があることを〕知りなさい。彼らは自ら語らないが、彼らには種に基づく特徴を備えており、実に〔生きものの〕種は互いに異なっている。
tesaṃ vo 'haṃ vyakkhissaṃ Vāseṭṭhā ti bhagavā
anupubbaṃ yathātathaṃ jātivibhaṅgaṃ, aññamaññā hi jātiyo.
tiṇarukkhe pi jānātha, na cāpi paṭijānare,
liṅgaṃ jātimayaṃ tesaṃ, aññamaññā hi jātiyo（Sn 117. verse 600-601）.

（令和２年度科学研究費基盤研究 (C)20K00059 による研究成果の一部）

〈使用テクストと略号〉

・本稿で扱うテクストは Pali Text Society 版を使用した。

AN = *Aṅguttara-Nikāya,* Morris, R. and Hardy, E. (ed.), 5 vols. PTS.

Dhp-a = *Dhammapada-aṭṭhakathā*, Norman, H. C. (ed.), *The Commentary of the Dhammapada,* 5 vols. PTS.

Ja = *The Jātaka Together with its Commentary*, Fausbøll, Viggo. (ed.), 6 vols. PTS.

Th-a = *Theragāthā-aṭṭhakathā, Paramatthadīpanī* (*Theragāthā-aṭṭhakathā*), Woodward, F. L. (ed.), 3 vols. PTS.

Sn = *Sutta-nipāta,* Andersen, Dines and Helmer Smith (ed.), PTS.

『大漢和』＝『大漢和辞典』縮写版 全 12 巻、諸橋轍次、大修館書店、1966-1968.

『ジャータカ全集』＝『ジャータカ全集』vol. I-X、中村元監修・補註、藤田宏達、田辺和子、前田専学など訳、春秋社、1982-1991.

・本稿では Pali Text Society 版の Ja 番号を J ○○○と表記した。

〈参考文献〉

今西順吉

1999 「アショーカ王法勅の saṃbodhi について（二）」『国際仏教大学院大学研究紀要』2: pp.57-82。

岡田真美子

1996 「仏教説話におけるエコパラダイム」『印度学仏教学研究』47（1）: pp.(226)-(230)。

1999 「仏教における環境観の変容」『姫路工業大学環境人間学部研究報告』1: pp.105-109。

2002 「東アジア的環境思想としての悉有仏性論」『東アジア仏教 ― その成立と展開：木村清孝博士還暦記念論集』春秋社、pp.355-372。

下田正弘

1997 『涅槃経の研究 ― 大乗経典の研究方法試論』春秋社。

馬場紀寿

2018 『初期仏教 ブッダの思想をたどる』岩波書店。

藤本晃

2003 「植物に命はあるか？ ― 南伝上座部の二種の命根 ―」『日本仏教学会年報』68: pp.87-109。

山崎元一

1983 「古代インドの森林と森住族」『東洋学報』64（3/4）：pp.359-387。

渡辺章悟

2007 「インド仏教から見た自然観の可能性」『「エコ・フィロソフィ」研究』1: pp.37-42。

Andersen, Dines and Helmer Smith eds.

1913 *Sutta-nipāta,* London, The Pali Text Society.

Cowell, E. B. ed., W. H. D. Rouse. translated.

1895 *The Jātaka or Stories of the Buddha's Former Births,* vol. II, Cambridge: Cambridge University Press.

1901 *The Jātaka or Stories of the Buddha's Former Births*, vol. IV, Cambridge: Cambridge University Press.

Fausbøll, Viggo. ed.

1877-96 *The Jātaka Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, 6 vols. London, The Pali Text Society.

Morris, R. and E. Hardy ed.

1885-1900 *The Aṅguttara-Nikāya,* 5 vols. London, The Pali Text Society.

Norman, H. C. ed.

1906-14 *The Commentary on the Dhammapada*, 4 vols. London, The Pali Text Society.

Schmithausen, Lambert.

1991 *The Problem of the Sentience of Plants in Earliest Buddhism*, Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

Woodward, F. L. ed.

1940-59 *Paramattha-Dīpanī, Theragāthā-Aṭṭhakatā, The Commentary of Dhammapālācariya,* 3 vols. London, The Pali Text Society.